

千葉市空襲犠牲者遺体焼却・遺骨の取り扱い調べ第1次報告 2016. 11. 6

千葉市空襲と戦争を語る会代表代行 伊藤章夫

1. はじめに

千葉市の1945年6月10日と7月7日の空襲では、約900人(934人千葉県警察史)が死亡している。東京新聞記者が河合節子氏を通して千葉市の事例を照会されたので、調べることになった。東京は一夜にして、10万人が死んだので火葬もままならず仮埋葬し、後日火葬したと言われる。千葉市は当時人口10万人の地方都市であった。短時間に数百人単位で市民が死亡した時、遺体はどうなったのであろうか。

2. 調査方法

調査は、空襲体験者の文献の証言(原文のまま収録)、当時の制度、桜木霊園の記録等を収集し分析する。

3. 調査結果

(1) 遺体集団トラック収容証言

事例1 日暮幸子(1911年生まれ、教員)の「あの日は忘れない」と題する右の作品が1975年第28回県展で入賞している。千葉市空襲の地上写真はない。詳細な絵も他にない。この絵画は、軍隊が黒こげの遺体を物のように処理している姿を描かれている。7月7日空襲の夜明け、葭川(よしかわ)の南側地区(絵の奥、太陽がある方が東方向)の焼け野原に軍隊・警防団によるトラックを利用した死体収容作業が描かれている。搬送は担架が使われているが、トラック荷台には両手・両足をつかんで放り上げている。



事例2 「(6月10日空襲、)死後、何日か経った遺体30-40

体が消防署の敷地に積まれている現場を見た。遺体は腐敗して、すごい悪臭を放っていた。トラック(民間トラックが徴用されていた)に積み込まれていた。」(柴田春光、当時12歳、国民学校6年、千葉郡塩田町)

事例3 「百六十二名だと思われます。その亡くなった方々を、今の消防署がありますね、あそこへ一時、運んだんです。そこから、今度は、トラックに積みまして、積むって言うは何だか、おかしいよう気がしますが……：載せまして、桜木町の市営墓地の広っぱへ運んだんです。・私も一緒に、そのトラックに乗って行きましたが、載せる人達は、皆、裸で、棺へも入れないで、そのまま、二段、三段に、トラックの枠から零(こぼ)れない程度に積みました。ロープは掛けませんでしたけどね。」(小河原福松、当時35歳、洋服仕立業、蘇我町1-170、千葉市空襲の記録 p112)

事例4 「爆死した人はトラックに積まれ、火葬され、」(加藤ミツ子、当時18歳、会社勤務、長柄町、千葉市空襲の記録 p119)

事例5 「その時にはみんな死人だって魚あつかうみたいにトラックに積んでいきましてね。」(三上しん、当時31歳、主婦、蘇我町1-224、千葉市空襲の記録 p117)

事例6 「日を置いて、兵隊さん達が各家をまわり遺体をトラックで引き取りに来ました。妹と弟の亡骸を引き渡すとき、母は兵隊さんに『この子達は小さな赤ん坊と未だ三つになったばかりの子供です。下に乗せられるとつぶれてしまいます。一番上に乗せてください』涙乍らうったえていた母のせめてもの、必死のお願いでした。母と私は去っていくトラックにいつまでも見送りました。花も何も無い野辺の送りでした。」

(渡辺紘子証言：寒川) 解説：東京空襲から千葉市寒川に逃れて来た母子が7月7日の千葉空襲で女兒と男

児が死亡してトラックに積まれる時の母の描写がある。結局、子どもの遺骨は母のもとに帰らなかった。渡辺紘子は亡くなった二人の姉である。）

事例7 「三日目にいきましたら、もう全然ありませんでした。話によるとなんだかトラックが来まとめて積んで・・・」（崎山笑子証言、当時 歳、戦争体験の記録p91）

事例8 「やがて、軍のトラックが来て焼けトタンにのせた死体を次々とトラックにのせてどこかに運んで行った。私の知っているだけでも十五人位は焼け死んでいた。」（植草昭三郎証言、44歳、カメラ商、戦争体験の記録p4、1972）

事例9 「病院の外に出ると前の倉庫の中には、死体が山とつまれていて、次々トラックで運ばれていきました。」（三橋とみ子証言、千葉女子師範本科2年、「ねむの花咲くを待たずに）千葉空襲・戦後70年、千葉市、p15、2015）

（2）遺体集団焼却証言

事例1 「桜木町へ行って、今度は降ろしたのが、四段か五段ぐらいにひとつかわらに積んだんです。翌日また来てくれて言ってましたので行ってみました。丁度、市役所の人や、警察の人が居ましてね。一人一人、検視してから、十字に穴を掘って、その上に人間を三段位に積んで、重油と薪でもって焼いた訳でございます。」（小河原福松、当時35歳、洋服仕立業、蘇我町1-170）

事例2 「・・・他はみんな二十体も三十体も一緒に石油かなんかかけて焼いたんじゃないかと思えますけど。」（三上しん証言、当時31歳、主婦、蘇我町1-224、千葉市空襲の記録p117）

事例3 「桜木町の霊園に運ばれて火葬されたらしい。」（柴田春光、（2）事例2に前述）

事例4 「・・・まとめて積んで、市営墓地で焼いたって事でした。その後、市営墓地から形ばかりのお骨を貰いましたけれども中に何が入っているんだか、私も開けませんでした。かえって自分の幻想が崩れるといけないと思って。」（崎山笑子証言、当時 歳、戦争体験の記録、p91）

事例5 「載せまして、桜木町の市営墓地の広っぱへ運んだんです。」（小河原福松、事例1に前述）

（3）集団焼却の遺骨扱い証言

事例1 「骨は一つの穴を掘って、皆、埋めました。」「各自が貰って来たのは、こんな小さい、早く言えば、寿司屋の湯呑みぐらいの大きさの物に一杯ずつでした。だから、どこのを貰って来たが、わからない訳なんです。」（小河原福松証言、前述）

事例2 「その骨を関係者が分けていただいたとのことでした。父は亡き姉の遺骨を取りに行き、長柄山で悲しみの葬式を済ませた。」（加藤ミツ子証言、当時18歳、会社勤務、長柄町）

事例3 「その後、市営墓地から形ばかりのお骨を貰いましたけれども中に何が入っているんだか、私も開けませんでした。・・・自分の幻想が崩れるといけないと思っ」（崎山笑子、事例4に前述）

（4）医師の検死証言

事例1 「家族は爆風で圧死したのではなく、土砂で生き埋めになり窒息死したと思われる。当時は医師が来て死亡原因を調べるゆとりはなかった。」（柴田春光、（2）事例2に前述）

事例2 「丁度、市役所の人や、警察の人が居ましてね。一人一人、検視してから、十字に穴を掘って、」（小河原福松、事例5に前述）

（5）罹災証明

「罹災証明も、その日のうちに発行されました。」（稲葉ふく証言、当時19歳、東京帝国大学第2工学部雇、蘇我町1-6）

(6) 未確認犠牲者情報

事例1 「福正寺にたてられた石碑には、百数十名の死亡者名が刻まれておりますが、通行人で遂に身元がわからなかった人々もあり、一家離散してしまつて氏名も刻まれてない人々もあります。」(稲葉正、当時22歳、東京帝国大学第2工学部特別研究生、千葉市空襲の記録 p328)

(7) 個別的に扱えた証言

事例1 「小さな棺の上に、三才の祝着を掛け、自転車の荷台に乗せて父が引いてお寺へ行きました。弟と私、伯父と従妹が付いて行きました。火葬にしないで、棺のまま埋めました。」(稲葉ふく、(5)に前述)

事例2 「うちのおばあちゃんと他に曾我野でも3人くらいは別々に焼いてくれたんです。福正寺でね。他の仏達には悪いけど・・・」(三上しん、(1)の事例5に前述)

事例3 「死体置き場が男子部の図書室だったんです。その部屋に先生を入れて十人、ずらりと並べたわけです。私どもはきれいに身体をふきましてね。」(岩梨泰子証言、当時 歳、千葉女子師範学校生本科2年、戦争体験の記録 p94)

事例4 「母は、5月8日の艦載機機銃で犠牲になりました。遺体は、慣習に沿って一旦は土葬されましたが、後日火葬され遺骨は帰りました。」(安達福太郎証言、当時0歳、口述2016.11.1)

事例5 「父は、6月10日の空襲で行方がわからず、後日、地中から遺体が掘り出されました。遺体は火葬され遺骨は帰りました」(森大死、当時3歳、旧蘇我町1丁目、口述2016.11.1)

事例6 「(父母を7月7日の空襲でなくす。)親父の弟が・・・来て死体を・・・家に運びました。・・・お棺が来ると・・・今井町の焼場まで・・・墓へ埋めました。」(吉田猛証言、当時国民学校6年、本町、千葉市空襲の記録 p328)

事例7 「6月10日・・・空襲で・・・千葉高女・・・2人の女学生が犠牲になった。・・・遺体に赤い毛布を掛けて・・・長洲の自宅まで運んだ。」(Mさん(匿名)当時、千葉高女5年、100人証言集 p50)

事例8 「伊藤睦子2歳は、後妻(継母)の子でした。彼女は睦子を背負っていて、月 日空襲で睦子が死亡、後妻は助かった。睦子は千葉医科大学病院坂の焼場で火葬された。」(石橋傳平、当時14歳、千葉商業学校3年、口述2016.11.3)

事例9 「2歳上の叔母の伊能三枝子は、7月7日空襲により神明町で負傷し、港町の実家で亡くなった。廃材を集めて福正寺の焼場で焼いてもらった。」(久能久枝、当時国民小学校6年、口述2016.11.3)

事例10 「(7月7日)空襲時、(陸軍士官学校を卒業した)父は市内の巡回をしており、空襲で爆弾などの破片を胸に被弾し、辛うじて部隊の兵舎に戻ったがここで息絶えたと思われる。・・・父の遺体は軍隊が引き取り、茶毘に伏して遺骨が兵隊によって我が家に届けられた。家の前で兵隊が「捧げつつ」の荣誉礼をした。」(功刀勲証言(くぬぎ)、当時3歳、2015.11.16)

事例11 「翌日、智光院の墓地の空地に多くの遺体が並べられた。小さな遺体もあった。兵隊が焼けたトタン板を担架代わりに使い、遺体を乗せ、近くに待機しているトラックの荷台に放り投げた。すでに、夏の遺体は死臭を放っていた。トラックは2台来ていたが、どこに行ったかは知らない。」(八木下義雄証言、当時国民学校5年)

(8) 当時の遺体処理規則

空襲下で避難が禁じられた防空法(1941年法改正)や昭和15年度千葉市防空計画書には遺体処理についての規定がない。

(9) 桜木霊園管理事務所記録

インターネットによると桜木霊園は、昭和14年11月14日墓地開設、納骨堂は昭和39年7月31日に開設され1468体、合葬墓は平成25年10月開設、焼骨収蔵数12000体あるとされている。空襲時の焼却・収骨について照会（2016. 11. 6）したが、記録がないと言う回答（2016. 11. 14）があった。

（10）推察研究

桜木墓地では警察が「検視」したとあるが氏名を確認したことか。それなら警察に死亡者の名簿があるはずだが、公表されていない。

4. 結論

（1）調査結果まとめ

①空襲死体が短時間に大量発生し、個々の空襲死体が識別できない場合、トラックで集団収容し、集団火葬している。識別できても遺族が死体を処理できないとみなされた場合もトラックで収集された。集団火葬の場合は、遺骨は特定できない。

②集団火葬の名簿（件数簿も可）がないので、集団火葬と個別火葬の定量的な関係が見つけられない。筆者は、過半数が集団火葬と推察する。

③6月10日の蘇我1丁目の爆弾被災、7月7日の焼夷弾空襲の体験者の証言を総合すると、軍隊が遺体をトラックで収容したのは、衛生保持のためでもなく、引き取り手ない遺体の無料サービスでもなく、国民が多数の遺体を見て、厭戦気分にならないように、戦意を維持するためであった。

④個別火葬は、ケース1として、死者が大量発生しなかった場所や後日発見された遺体、ケース2として軍人、警防団員、高級官僚等の遺体である。前者は15%程度、後者は5%以内だと見積もると、合計2割程度だと思われる。千葉空襲の場合、約8割が集団火葬だと推定される、

（2）結論

空襲死者が短時間に大量に発生した場合、家族が遺体をひそかに引き取らない限り、警防団や軍隊がトラックで収容し、桜木墓地で複数の遺体が集団のまま焼却（荼毘にふす）された。

遺体の集団焼却後、遺骨が個人ごとに採取されず、遺骨が欲しい人には誰の遺骨かわからない物（子供が死んでも大人の骨が渡された等）が渡されたと言う。遺骨が遺族に確実に渡すシステムは用意されていなかった。

家屋が破壊された場合は、罹災証明書が発行されたが、短時間に大量の人が亡くなった場合、医師や軍医が住所、氏名、年齢が不明の犠牲者の死亡証明が発行されることはなかったと推定される。

日本では亡くなった人を大切に弔う習慣があったが、戦争・空襲における大量の死者は大切に扱われなかった。当事の実態は、生きている人間の人権すら尊重されず、戦争に動員され、戦地で殺し、殺された。市民の住んでいる場所が戦場となったのである。

5. 文献

①千葉県戦争体験の記録、千葉県戦争体験記録運動をすすめる会、1976、1973、1972

②千葉市空襲の記録、千葉市空襲を記録する会、松本貞雄編集、1980

③千葉市大空襲とアジア太平洋戦争の記録100人証言集、千葉市大空襲とアジア太平洋戦争の記録100人証言編集委員会、2009

④新証言集（伊藤章夫パソコン内保管、未発行）、伊藤章夫